



有害鳥獣原皮の活用率向上を目指す、千葉発・獣皮循環モデル 国内でも先進的な、原皮専用冷凍保管システムを核に、千葉県内全域の「原皮サプライチェーン」を構築 高品質な獣皮を「チバレザー」として展開し、新たな産業と雇用を創出

千葉県内皮革業者・ジビエ関連業者の有志団体 シシノメラボ（代表：辻榮亮／旧千葉レザー協議会）は、これまで有害鳥獣対策の過程で廃棄されてきた野生動物の「原皮」に着目し、“獣害”を地域資源へと転換する循環型の取り組みを継続してきました。

これまで千葉県内ではジビエ活用が進む一方で、皮や骨などの残渣が十分に活用されず、原皮の多くが廃棄されてきたという課題がありました。シシノメラボは、これまで顕在化してきた原皮廃棄の課題を、個別事業者の対応に起因するものではなく、回収・保管・流通に関する仕組みが十分に整備されていないという構造的課題として捉え、資源循環の基盤整備に取り組んできました。

このたび、千葉県内全域を対象に、原皮の回収から保管～製革～製品化に至るまでの工程を一連の流れとして整理し連動させる「野生獣原皮サプライチェーン構築による地域新産業創出プロジェクト」を開始しました。（千葉県 令和7年度ちば地域産業創出実証プロジェクト採択事業）

本プロジェクトでは、原皮専用冷凍保管庫の配備等による保管環境の整備を進めることで、原皮の品質劣化を抑制し、活用率の向上を図るとともに、これまで廃棄されてきた獣皮を安定的に資源化し、高品質な獣革として次の工程へとつなげていきます。

さらに、土に還る革「チバレザー」をはじめとした地域ブランドの展開を通じて、有害鳥獣対策、廃棄物問題の解決、地域資源の高付加価値化を同時に実現し、新たな雇用と産業を生み出す循環型モデルを千葉から全国へ普及・発信して参ります。



▲ 原皮専用冷凍庫を新たに配備
千葉県内 4箇所
(W1664×D758×H895 mm)



▲ シシノメラボ発起人 3名



▲ 「土に還る革」チバレザー製品

1) 千葉県内で進むジビエ活用。一方で残る「獣皮の未活用」と処理負担

農林水産省によると、令和5年度の獣類（イノシシ）の捕獲頭数は全国で52.2万頭。千葉県においては3.5万頭捕獲（令和5年度）されており、その中でジビエ（いわゆるお肉など食品加工）として活用されている割合は最新のデータでも5千頭（14.47%）、獣皮に至ってはほぼ使われることなく処分されています。活用されず残渣として処分するのは倫理的にも環境的にも、何より持続可能な社会実現にむけた昨今の流れに大きく反するものであると考えています。

また、令和5年度における千葉県内ジビエ廃棄物処理量は120トン、処理経費は800万円とされ、解体施設運営者にとって費用面・心理面の負担が大きい状況です。

出典1：千葉県野生鳥獣対策本部発表「主な獣類の推定生息数と捕獲数」より

出典2：政府統計 e-Stat 野生鳥獣資源利用実態調査 表番号3-1「令和5年度食肉処理施設の解体実績等（解体頭・羽数規模別、全国農業地域別、都道府県別）」より

出典3：農林水産省「令和5年度野生鳥獣資源利用実態調査」（政府統計の総合窓口 e-Stat 掲載

「令和5年度 廃棄物処理量・廃棄物処理経費—解体頭・羽数規模別、全国農業地域別、都道府県別—」より）

2) 原皮専用「原皮専用冷凍保管システム」を核に、保管・回収・流通を仕組み化へ

獣皮は常温では急速に腐敗が進み、さらに一般的な冷凍温度では内部劣化を十分に防ぐことができません。加えて、食肉加工施設において原皮は残渣扱いとなるため、食肉とは分離した保管体制が求められます。

こうした課題から、適切な温度管理が可能な原皮専用冷凍庫の整備が不可欠でした。本プロジェクトでは、木更津市、君津市、富津市、館山市の県内4箇所の食肉加工施設等に冷凍保管庫（-25℃以下）を新たに配備し、収集から製革までを繋ぐサプライチェーンを確立しました。

このインフラ整備により、これまで廃棄せざるを得なかった原皮を高品質な状態で保管・確保することが可能となり、参入障壁を大幅に下げることになりました。

今年度は、チバレザーの製革数を前年比50%増の約300枚まで引き上げることを目標としています。

■千葉県内 原皮専用冷凍庫設置施設（企業）

- ①KURKKU FIELDS 国産ジビエ認証施設 オーガニックブリッジ
千葉県木更津市 | 株式会社KURKKU FIELDS
- ②君津市獣肉処理加工施設 房総いのかジビエセンター
千葉県君津市 | 合同会社 房総山業
- ③獣肉解体処理施設 G.B.A.
千葉県富津市 | G.B.A.
- ④館山ジビエセンター
千葉県館山市 | 合同会社DIEM



3) 千葉モデルを全国へ、廃棄される獣皮 100%活用の社会へ

私たちは、千葉県内で捕獲される野生獣由来の獣皮革について、活用率100%の実現を目標としています。

事業計画に基づく試算では、県産のイノシシ、シカ、キョン等の原皮が安定的に供給される体制が整うことで、なめし革（革材料）段階においても、年間約 2,660万円以上の市場価値を創出できるポテンシャルが見込まれています。

■フェーズ 2（2026年～）

構築したネットワークを本格運用し、2027年2月までに年間 1,000万円の売上を目指します。

■フェーズ 3（～2030年）

廃棄コスト削減と製品販売収益を両輪とし、単年度黒字化を実現。千葉県での成功モデルを基に、全国の有害鳥獣問題を抱える地域へこの仕組みを横展開し、野生動物を「害」ではなく、地域の「財」へと変える未来を創り出します。



▲ 廃棄処分される獣革

4) 団体概要

シシノメラボは、千葉県内で捕獲され廃棄処分される獣に“革”としての価値を持たせ「害獣を地域の財獣」に変え、地域の課題を魅力へと転換するローカルSDGs共創プラットフォームを目指しています。

「真の循環資源（獲る→食す→創る/学ぶ→還す）」の実現に向け、パートナー企業・団体と連携し、地域レベルで持続可能な社会＝循環共生型の社会の構築を進めています。

【団体名】シシノメラボ

【所在地】千葉県長生郡睦沢町河須ヶ谷13番地4 1008株式会社内

【発起人】発起人代表：辻榮 亮、発起人：大阪谷未久、佐藤剛

【発足年】2023年5月

- 【団体概要】
- ①千葉県内で捕獲される獣皮を資源として活用し「害獣を地域の財獣」に変える。
 - ②本会員内での活発な意見・情報交換を行い、獣資源を無駄なく活用し、真の循環資源（獲る→食す→創る/学ぶ→還す）実現に向けたパートナーシップを図る。
 - ③業界団体を設立し、第三者的な組織で現場の声を広く情報発信をすることで“いのち”と“お金”の大事さを伝え、価値化していく。



写真左より

発起人代表 辻榮 亮：総天然素材革工房「革榮」店主/革職人。イノシシ革を中心に製造・販売を行う。「還るいのち」主宰。

発起人 大阪谷 未久：「Atelier Lab.伝右衛門製作所」店主/革職人。キョン革を中心に製造・販売を行う。

発起人 佐藤 剛：KURKKU FIELDSの社員/革職人。獣害問題について校外学習や企業研修に取り組む。

本件に関するお問い合わせ先

シシノメラボ（PR事務局：幕張PLAY株式会社）

広報・PR室：石井 貴美子／秋山 菜摘

携帯：090-2425-4923 Mail: m-play@makuhari-play.jp

